

〈アジア遊学248〉

明治が歴史になったとき

史学史としての大久保利謙

【目次】

序論……………佐藤雄基……………4

第一部 「明治」が歴史になるとき

大久保利謙と戦後日本近代史研究の出發……………松沢裕作……………14

政治学者における「明治」の歴史化……………松田宏一郎……………31

明治政府による記録編纂・修史事業と近代文書……………箱石 大……………49

第二部 大久保利謙の歴史学

大久保利謙と近代史学史研究……………マーガレット・メール(訳)・佐藤雄基・渡邊剛……………64



[本扉・表紙使用図版]

●大久保利謙原稿

(『大久保利謙歴史著作集3 華族制の創出』吉川弘文館、1993年)(個人蔵)

●大久保利通書簡 門脇重綾宛(国立国会図書館憲政資料室所蔵)

大久保利謙と立教大学史学科(一九五八〜七二)……………小澤 実……………86

大久保利謙『日本近代史学事始め』についての覚書

—— 大久保史学の史学史史的検討のために……………今井 修……………114

小伝・大久保利武—— 大久保家三代の系譜……………松田好史……………147

第三部 大久保史学にみるアーカイブズ・蔵書論

大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書

—— 立教大学図書館・学習院大学史料館所蔵「大久保文庫」……………佐藤雄基……………164

国立国会図書館憲政資料室と大久保利謙の構想……………葦名ふみ……………183

大久保利謙と蘭学資料研究会・蘭学書……………大島明秀……………205

華族と歴史学—— 大久保利謙の華族研究と華族史料……………小田部雄次……………220



〔目次使用図版〕

- 『大久保利謙歴史著作集』(1986年刊行開始)の頃(個人蔵)
- 若き日の大久保利謙「東京帝国大学五十年史」(1932年)刊行の頃(個人蔵)
- 下地図版=志筑忠雄「万国管闡」乾之巻の内題(立教大学図書館所蔵)

序論

佐藤雄基

一、歴史家と史料——本書の背景

歴史家と史料をめぐる風景から史学史をみることに、これが本書の狙いである。本書の企画は、二〇一七年十月二日（金）・九日（土）の公開シンポジウム「大久保利謙と日本近代史研究 家族・学問・教育」（於立教大学池袋キャンパス、主催・立教大学日本学研究所）に遡る。^①大久保利謙（一九〇〇～一九九五年）は、大久保は日本近代史研究の先駆者のひとりであり、国立国会図書館憲政資料室の創設に関わるなど、近代史研究のための史料環境の整備に尽力した。また、第二次世界大戦後、新制大学において近代史が歴史学の研究・教育の対象となっていく中、大久保は一九五九年より立教大学文学部史学科において最初の日本近代史担当教員となった。その縁もあって、明治期の文化史・学問史・教育史に関する貴重書を中心にして大久保の蒐集した蔵書が生前立教大学に寄贈され、立教大学図書館所蔵「大久保利謙文庫」となった。

このシンポジウムの成果の一つとして、歴史家が「明治時代」を新たに歴史学の対象としたとき、歴史を書

く材料としての史料の収集・編纂・公開が課題だったことが浮き彫りになった。大久保の近代史研究は史料編纂やアーカイブズ（未来に伝達するため保存された記録・資料群あるいはその保存施設）の整備と不可分であった。そこで、大久保利謙が整備に関わったアーカイブズを素材にして、史学史・史料論・蔵書論の観点を交えて、日本近代史研究の誕生の瞬間を描き出す論集を編むことを企画した次第である。本書をつうじて、新しい時代がどのようにして歴史学の対象となるのか、その一端を考える材料を提供することができたら幸甚である。

「史料をして語らしめる」。言語論的転回を経た現代歴史学では古めかしく聞こえるが、少なからぬ職業的な歴史家は経験的にこの言い回しを好む。新たに発見した史料を使って歴史家が歴史を生き生きと叙述するとき、史料が歴史家をして語らしめると言い方さえできるだろう。だが、後世に伝わって史料として利用されることになるテキストやモノは、基本的には後世の歴史家の史料たるべくして作成された訳ではない（政治家の回想録など、後世の史料たるべく作成されたと思われるテキストも存在するが）。それらは歴史家がある目的のもとに読み込んで用いることよって「史料になる」。史料とは歴史家が自らの語りの材料として選び出して用いるものである。歴史家が何を語ろうとするのかによつて、史料として選択されるものは多様である。ここでのいう歴史家とは、大学に所属する職業的な歴史研究者に限定されるものではなく、学芸員・図書館員などの（史料を直接取り扱う）専門職やアマチュアの歴史家を含めて、広く史料を用いて歴史を書く／語るものを想定している。歴史家なくして史料はなし。しかし、史料がなければ歴史家は歴史を書くことはできない。二〇〇九年に公文書管理法が制定されて、近年では公的なアーカイブズの整備が進められつつあるが、それ以前の近代日本では、アーカイブズの未整備という条件が重くのしかかっていた。そうした中、歴史を書くこととするならば、自ら研究を切り開くために史料保存・調査にも関わらなければならなかった。同時代資料はいかにして「史料になる」のだろうか。²過去が「歴史になる」とともに「史料になる」過程にこそ、歴史学が何によつて何を対象とする学問なのか、その本質がかいまみえるのではないかと思う。

歴史学の展開を対象とする歴史研究のことを「史学史」という。近年、史学史研究が流行している。その背

景の一つには、歴史学を含む人文系諸学問のおかれた一種の危機的状況のもと、自らの学問の由来・アイデンティティを再確認しようという機運があるのだろう。その側面だけ強調すると、史学史研究が回顧的で、後ろ向きのものであるようにみえてしまうだろう。だが、決してそうではない。もう一つの背景には、国民国家論を経て、歴史家は史料を用いてゼロから歴史を「復元」してきたのではなく、あらかじめ何らかの構想や歴史像をもっていた以上、そうした歴史家の時代被拘束性を自覚することが必要だという認識が広まったことがある。それはもちろん「今ここ」に生きる私たち自身も「自由」なのではなく、自覚し得ないものを含めて、何らかの時代被拘束性をもつ可能性への「気づき」をもたらすものである。長い時間軸のなかで、未来の歴史家たちの眼に私たちがどうみえるのかを意識させられるという意味において、史学史研究は未来志向の学問である。こうした史学史の研究において、本書が目指すのは、どのような時代状況のもとで歴史家がどのように史料と向き合ってきたのかに注目する、歴史家と史料からみた史学史である。

伝統的な史学史は過去の歴史家の歴史叙述それ自体の内在的な分析を中心とし、しばしばその叙述のもつ政治性を指摘してきた。だが、歴史家の営みは狭い歴史学者のサークルの中でだけ行われてきた訳ではない。どのような時代被拘束性のもとに、史料を見出してきたのか。史料それ自体も様々な意図があり、それをどのように読みとるのかもまた、読み手の問題である。歴史家は自らの構想や歴史像について、史料から引き出した情報によって根拠づけたり、修正を繰り返したりしていく。そしてどれほど豊富にみえても、所詮は（しばしば権力者の歴史が記録に残されやすいと批判されるように）様々な恣意と偶然をともなうて伝わり、かつ断片的な記録に過ぎない「史料」のみから全体像を「復元」するのは本来的に不可能であり、史料から導かれた断片的な情報を繋ぎ合わせるだけではなく、史料から直接導かれた情報以外のものを多く利用せざるを得ない（そこには社会科学や比較史のもつ知見や「設計図」、そして私たち自身のもつ「常識」が含まれ得る）。そのような歴史叙述が、私たちに断片的・選択的に残された「史料」に関連づけて過去を「復元」してみせたことを積極的に評価するか、あるいはどこまでも過去の（究極的には不可知の）「真実」の姿とは似て非なるものに過ぎないとみるかは、

意見が分かれるところであろう。⁽⁴⁾ だが、純粹に史料のみによって過去を再構成する訳ではなく、「史料」と史料以外の情報をどのように結びつけるか、その試行錯誤によって不断に更新されるものであるにせよ、「史料になる」何かがなくては歴史家は何かを語ることができない。過去について何らか語ろうとするとき、史料との偶然の出会い、史料をめぐる人と人とのコミュニケーションといった個人的な体験を含めた、歴史家と史料との関係が重要となるのは、史料に基づいて過去を語ることの本来的な困難さに由来する。こうした歴史家と史料との関係こそが、歴史叙述のもつ面白さと危うさとともに、歴史家同士の相互批判を担保する。これこそが史料に基づく歴史家の歴史叙述と単なる物語とを区別するのではなからうか。

本書の対象となるのは、史学史というより「近代文化史」であるのかも知れない。だが、「近代文化史」という個別一分野化してしまうことで、歴史学にとつての史学史の必要性が見失われることを恐れている。編者の専門は日本中世史であるが、中世史家も時代区分の縦割りを越えて、近世・近代の史学史を学ぶ必要を痛感している。中世の古文書・古記録も近世近代の伝来過程を経て現在「史料」となっているが、それらのほとんどは偶然と何らかの意図が重なりあつて現在に伝わったものであり、そのバイアスを正確に理解する必要がある。編者の研究から、一例をあげると、南九州の中世武家文書として著名な「長谷場文書」は、子孫の授爵運動にもなつてその由緒として利用され、そこにアカデミズムの歴史家が関わつて世に知られるようになったものである。⁽⁵⁾ 二十世紀前半にアメリカで活躍した歴史家朝河貫一は、一九一八年年末から翌年年初にかけて、宝塚に住む長谷場純敬宅において家伝の「長谷場文書」を調査し、様々な話を長谷場から聞いた。その出会いによつて九州の武家文書に関心を向けて、同年中に九州調査に赴くことになる。日本封建制に関する日本中世古文書の英訳である朝河の編著 *The Documents of Iriki* (一九二九年) で知られる「入来文書」の再発見は、鹿児島を訪れた朝河がたまたま郷土史家による自治体史編纂を知ったことがきっかけであつた。公的なアーカイブズが未整備であつた近代日本において、「家」や「地域」における顕彰運動と史料・史跡保存は密接に結びつき、歴史学の専門家と非専門家が緊張をはらみつつも多様な人的ネットワークを結んで協同していた。そう

した条件は現在もそれほど変わりがないのかもしれない。歴史家が掘って立つ「史料」がそもそものようなもので、過去と現在とのあいだにどのような来歴を経てきたのか、そこに歴史家はどのように関わってきたのか、それは過去と現在とを結ぶ史学史の問題である。現代歴史学の潮流の一つに史料論の活況があるが、私たちが手にすることのできる史料とは何かという問題に史学史は直接かかわってくる。こうした問いに基づく「史学史」は「文化史」の一部であるとともに、史学理論・方法論とならんで歴史研究の基礎を構成するのである。

二、本書の構成

以下、本書の構成を述べる。本書は三部構成から成る。

第一部「明治」が歴史になるときは、新しい時代が歴史研究の対象となる過程を史学史の対象とした。松沢裕作「大久保利謙と戦後日本近代史研究の出版」は、大久保利謙のもつ多様な人的ネットワークを通じて、昭和初期に集中して行われた周年事業に着目して、卒業論文を中世史で執筆した大久保がそれらの事業に関わる中で近代史研究に入っていくことを指摘し、編纂事業が歴史家を育てたと論じる。だが、なぜ編纂事業でしか歴史家が育たなかったのか。後掲の葦名論文ともかわるが、公的な常設アーカイブズの未成熟という問題が重くのしかかってくるように思われるのである。

このような狭義の（「史学科」的な）歴史学に対して、諸学問における歴史研究はどうだったのか。その一例として、政治学において明治時代がどのようにして歴史研究の対象となるのかを追究したが、松田宏一郎「政治学者における「明治」の歴史化」である。松田論文で注目されるように、政治学における「明治」の歴史化の画期となったのは、一九二七年の吉野作造の論文「我国近代史に於ける政治意識の発生」である。このとき大久保は国史学科の学生だったことを念頭におくと、大久保と政治学者たちが一種「没交渉」であったという指摘が興味深い。その背景を考えることが重要であろう。

「歴史になる」とき、同時代的には現用であった文書は、歴史叙述の材料に変わっていく（史料になる）が、そのときに取り扱われ方はどのように変わっていくのだろうか。箱石大「明治政府による記録編纂・修史事業と近代文書」では、維新政権期の明治太政官文書が、明治政府による各種の編纂事業において、どのように扱われたのか、特に文書への名称付与とその分類に注目して論じている。そして、近代史料学の先駆的な業績であった大久保の近代文書論に関して、現在の研究水準を踏まえた位置づけを行う。戦前の維新史料編纂事務局の業務として「史料となる文書に名称を付与して分類する作業」があり、そのための内規が作成されていた。箱石論文によれば、大久保は元維新史料編纂官の藤井貞文からその内規について教示を得て、近代文書学の論文を執筆したという。藤井は国立国会図書館憲政資料室の調査員をつとめ、大久保の同僚でもあった。こうした人のつながりの上に、編纂事業で培われた学知・経験知が伝わり、戦後、近現代史料論が発せられたという事実は、編纂事業が歴史家を育てたという松沢論文の指摘ともかかわって興味深い。

第二部「大久保利謙の歴史学」では、大久保利謙個人に焦点をあてる。マーガレット・メール「大久保利謙と近代史学史研究」は、大久保の史学史関係の著作を網羅的に検討することで、その関心の変遷や特徴を探る。メール氏は近代史学史研究の第一人者であり、二〇一七年には主著の翻訳『歴史と国家——19世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問』（東京大学出版会）が刊行された。大久保の史学史研究をもつとも発展的に継承した歴史家であるメール氏が、大久保史学史をどのように読み解いているのかに興味深い。博士論文執筆中に日本に留学した際、大久保と出会った思い出が語られるなど、この論文自体が史学史の重要な証言であろう。

小澤実「大久保利謙と立教大学史学科（一九五八〜七二）」では、編纂事業によって先行していた近代史研究が大学での教育・研究の対象となるときに焦点をあてる。自伝や回想記事だけではなく、当時の立教大学の課程表や教授会資料（！）などを活用して、史学科という組織の制度設計や将来構想を軸に据えて、そのなかに立教への大久保の招聘を位置づけている。戦後の新制大学における史学科の歴史をどのように再構成するのか、

一つのモデルケースとなる論文である。それとともに、現在の大学行政に生きる著者自身の感慨が随所に溢れている点も興味深く、立教大学史学科創設の頃のフィクサーである小林秀雄に向ける眼差しとともに、⁽⁷⁾ 大学組織における歴史家の生き方について考えさせられる。

今井修「大久保利謙『日本近代史学事始め』についての覚書——大久保史学の史学史的検討のために」は、大久保の自伝『日本近代史学事始め』（岩波新書、一九九六年）の成立過程を明らかにする。優れて文献学的な研究であるとともに、同書の作成に関わった著者の語りは、ひとつの自伝がどのようにして生成するのかという一種のオーラルヒストリーにもなっている。松沢・小澤・今井各論文は、それぞれの視点から『日本近代史学事始め』の記述を批判的に読みといており、大久保を史学史的に再検討する基礎となるだろう。

松田好史「小伝・大久保利武——大久保家三代の系譜」は、大久保利謙の父利武に関して、初めての本格的な伝記的研究であり、次兄牧野伸顕のブレンとしての一面を明らかにした。利武は内務官僚であったが、父利通や故郷鹿児島⁽⁸⁾の歴史に強い関心を持ち、その歴史を書いた。歴史を書くことは職業的な歴史研究者の専売特許ではない。近い時代について書くことは、自らのアイデンティティとする人びとの営みでもあった。その営み自体が「史料」の伝来・生成とも深く結びついていたことを忘れてはならないと思う。

第三部「大久保史学にみるアーカイブズ・蔵書論」では、大久保の構築したアーカイブズや蔵書、「史料」に焦点をあてる。佐藤雄基「大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書——立教大学図書館所蔵・学習院大学史料館所蔵「大久保文庫」は、蔵書からみる史学史の試みである。⁽⁸⁾ 利謙の学問形成を探る材料となる旧蔵書を紹介するとともに、松田好史論文とも重なるところがあるが、利謙の父利武の旧蔵書に焦点をあてている。留学生・文化外交史研究に有益であるとともに学問的な近代史研究の成立以前に、大久保家や鹿児島という「家」・「地域」における修史事業に利武が関わっていたことに注目し、大久保利謙のバックグラウンドを考えた。

葦名ふみ「国立国会図書館憲政資料室と大久保利謙の構想」は、大久保が貴族院五十年史編纂掛にかかわった縁から、国立国会図書館における憲政資料室の「創設者」となっていく様相を描く。貴族院五十年史編纂に

関していえば、大久保が近代史研究を始めるきっかけが昭和初期に多く行われた周年事業にあったことを指摘する松沢論文とも関わる。「歴史を書く」ことを目的に設置された憲政史編纂が尾佐竹猛の構想のもとで、まず史料収集を中心に行うようになった。この点は、明治期の修史事業が最終的に歴史叙述を放棄して史料編纂事業として存続したと相似するかも知れない。歴史編纂事業は史料編纂事業から始めざるを得なかったが、公的・恒常的なアーカイブズが整備されれば、史料編纂事業の必要はなくなっていくのだろうか。あるいは史料編纂事業自体がアーカイブズとしての新たな社会的使命を担っていくのだろうか。この問題を考えるとき示唆的な事例として、東京大学史料編纂所は近年、大日本史料編纂の目的で収集した所蔵史料・データの公開を進めており、アーカイブズ的な性格を強めているように思われる。日本における歴史学の「かたち」を考えるとき、葦名論文は示唆に富む。

また、貴族院五十年史編纂掛と憲政史編纂会において写本作成・原本返却が主であったという指摘も興味深かった。江戸幕府による修史事業や明治期以来の東京大学史料編纂所の調査では、基本的には文書原本を収集することなく、その写を作成して（謄写本、影写本、近年では写真撮影）文書自体は所蔵者に返却する、というスタイルが主だった。⁹⁾ そうであるならば、戦後の憲政資料室において原本の収集が始まったのは画期的であるといえよう。単に購入の予算がいたからなのか、それまで史料を保存してきた「家」が戦後の社会変動の中で保存できなくなったといった社会的な背景があるのか、あるいは史料そのものに対する考え方の変化があったのか（歴史編纂に必要な情報だけ収集できればよいとするのではなく、史料保存を意識し始めたのか）。何故か。

大島明秀「大久保利謙と蘭学資料研究会・蘭学書」は大久保の蘭学観と蘭学研究・蘭学書蒐集の特徴を明らかにするものである。大久保の蘭学観が「日本の近代化」にとつての意義を探るといふ目的の制約を受けており（メール論文における「目的論的」傾向という指摘とも関わる）、板沢武雄『蘭学の発達』の域を出るものでもないという指摘は重要である。一方、自身の研究にほとんど用いることのない蘭学書・洋書やその和訳書、版本、写本などを大久保が熱心に蒐集しており、現在「大久保文庫」のなかの蘭学書コレクションを形成していた。

大久保が蔵書構築の際に抱いていた構想を考えるうえで重要な論考である。

小田部雄次「華族と歴史学——大久保利謙の華族研究と華族史料」は、大久保の華族研究と華族史料に焦点をあてつつ、華族による歴史研究の特徴を探ったものである。その際、勲功華族としての大久保家の位置という指摘は、大名華族には大久保の名声は通じなかったという葦名論文での指摘とあわせ、興味深い問題である。島津家や毛利家の大名華族の家における編修所については研究が深められているが、⁽¹⁰⁾松田好史論文・佐藤論文で指摘されているように、大久保利武・牧野による父大久保利通に関する史料収集など、明治維新の歴史を回顧する勲功華族の動きも重要である。

序論にしては冗長に過ぎた。ぜひ詳しくは各章を読んでいただきたいと思う。なお本書は、立教SFR共同研究「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」（研究代表者＝小澤実）と文部科学省科学研究費補助金（基盤C）「近代日本の大学における歴史研究・教育体制と学術行政」（研究代表者＝奈須恵子）による成果である。また、大久保利謙氏のご遺族からは、生前の利謙氏のお話を伺うとともに、資料提供など格別のご高配に預かった。

注

(1) シンポジウム企画者である小澤実による「二〇一七年度公開シンポジウム 大久保利謙と日本近代史研究 家族・学問・教育」（『立教大学日本学研究所年報』一七号、二〇一八年）参照。当日の登壇者と報告タイトルは以下のとおりである。

マーガレット・メール「大久保利謙先生と私の研究 史学史・漢学教育・音楽史を中心に」

佐藤雄基「大久保利武と利謙・立教大学図書館所蔵大久保コレクションからみた大久保父子の学問形成」

松沢裕作「大久保利謙と戦後日本近代史研究の出発」

小澤実「大久保利謙と1950-60年代の立教大学史学科」

今井修「大久保史学の史学的的位置」

以上の五報告とともに、十二月九日の昼休みには立教大学図書館の全面的なご協力のもと、同図書館所蔵「大久保利謙文庫」の内覧会を催した。

- (2) 二〇一七年度の国立歴史民俗博物館企画展示「1968年」無数の問いの噴出の時代」は、近い時代の「歴史化」とその史料生成を考えるうえで示唆的だった。
- (3) この部分は「遺された歯の一片から死滅した過去の動物の全体を復元して見せる古生物学者の大胆さが必要である。この大胆さは歴史学に必要な精神である」と説く石母田正『中世的世界の形成』（一九四六年）（初版序は一九四四年）の著名な序文を意識している。石母田はそれに続いて「この大胆さを学問上の単なる冒険から救うものは、資料の導くところにしたがって事物の連関を忠実にたどってゆく対象への沈潜と従来の学問上の達成に対する尊敬以外にない」と記す。だが、この比喩では、史料をめぐる（必ずしも職業的な歴史家ではない）人と人との（偶発性を含む）コミュニケーションの問題が入らず、零れ落ちていくものがあるように感じている（この点、内田力氏に助言をいただいた）。
- (4) 「実証的な歴史家は歴史の真実を語っていない」とする類の批判は、後者の感覚に近い。一方、実証的な歴史家自身からも、前者に対しては「設計図を外から輸入している」「近代的概念・枠組みを過去に当てはめている」という類の批判がある。第一の批判の問題は永遠に解消されないのかも知れないが、歴史家同士の応酬である第二の批判に関していえば、学史を振りかえるときに「後人の後知恵」とならないように注意しなければならないだろう。
- (5) 以下の説明は、拙稿「朝河貫一と入来文書の邂逅——大正期の地域と歴史をめぐる環境」（河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像——長期の19世紀』を生きた地域」岩田書院、二〇一三年）。
- (6) 拙稿「史料論の時代」における古文書学の可能性——古文書学を学ぶ人のために」（秋山哲雄・田中大喜・野口華世編『増補改訂 日本中世史入門』勉誠出版、二〇二〇年度中刊行予定）でその一端を示したが、政治史・制度史・文化史における全般的な研究状況については別途、研究動向をまとめる予定である。
- (7) 小澤実「小林秀雄とその時代 戦前・戦中の立教史学科・史学会・『史苑』（仮）」（小澤実・佐藤雄基編『史学科の比較史』勉誠出版、二〇二〇年度中刊行予定）。
- (8) 二〇一七年二月二十日に内田力氏・神野潔氏とともに「大久保文庫」の大久保利武コレクションの調査を進める中で、史学史上の大久保の位置づけが課題として浮上したことが直接の契機であった。当初は、利武や朝河貫一をはじめとするイエール大の日本人留学生への関心に基づく。本書所収の諸論考が示すように、歴史家が研究を進めるにあたっては史料との出会いが大きな意味をもつが、大久保の残した史料が導き手となったことに因果を感じる。
- (9) 江戸幕府の古文書探訪事業については、相田二郎『相田二郎著作集3 古文書と郷土研究』（名著出版、一九七八年）。なお、関連文献も含めて、拙稿「明治期の史料探訪と古文書学の成立」（松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社、二〇一五年）参照。
- (10) 一例として、島津家に関して寺尾美保「明治期島津家における家史編纂事業——大名華族による「国事執筆」始末取調」（前掲注9松沢編著所収）など。